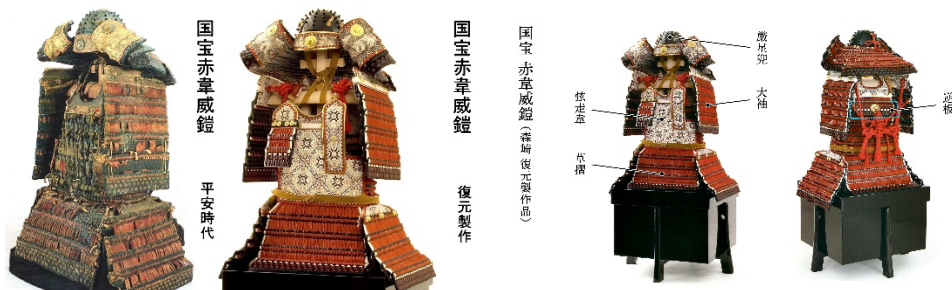


「甲冑の美学とその変遷」 甲冑師／株式会社西日本甲冑武具研究所 代表取締役 森崎干城 様

甲冑師の森崎です。まずお伝えしたいのは、甲冑には「二面性」があるということです。一つは晴れの装いとしての側面。戦いに赴く時、あるいは勝利して帰還した時、甲冑は武士にとって最も華やかな晴れ着となりました。しかし一方で、もし戦場で命を落とせば、その甲冑はそのまま死に装束となります。佐賀鍋島藩の『葉隠』には「武士道と云ふは死ぬ事と見付けたり」という言葉がありますが、これは「今日が最後の日だと腹を括れば、保身や打算といった邪念を捨て、正しい判断と行動ができるでしょう。己に正直に行動した結果がどうであっても、それを受け入れて生きよ」という覚悟を示したものです。そうした武士の精神が、実は甲冑の随所に込められているのです。

甲冑の数え方は「一領、二領」といいます。侍が命を懸けて守った領土と同じ単位で数えるほど、甲冑は重い意味を持つ存在でした。物の単位としても、最も大きなものの一つと言えるでしょう。



こちらは岡山県立博物館所蔵の国宝、平安時代の赤韋威鎧です。私が二十年ほど前に復元したのですが、第一印象は「真っ赤で派手」。これが千年前の甲冑です。当時の大鎧には特徴がいくつもあります。頭部の兜は厳星兜といい、小さな鉄板をリベットで留めて半球形を作り、そのリベットの頭を装飾としても活かしています。腰から太腿を守る草摺は四枚に分かれ、馬上でも前後左右をしっかり防御できる構造です。肩の大袖は盾の役割も果たし、胴には弓の弦が引っかからないよう弦走韋という革が張られています。

この国宝の前面には、なでしこの花が描かれています。なでしこと聞くと女性的なイメージを持つ方も多いですが、侍にとっても特別な花でした。一茎一花、つまり「二心を持たない」「裏切らない」という象徴です。この甲冑の武士はその意思を示すため、最も目立つ正面にこの花を描いて戦場へ向かったのです。

背面には逆板という部分があり、これは胴とわずかに遊離しています。馬上で肩にかかる衝撃を和らげるための“スプリング”の役割を果たしており、千年前からこうした繊細な工夫が施されていました。



鎌倉時代になると、甲冑はさらに豪華になります。甲冑史の中でも最も工芸的に優れた時代と言

えるでしょう。南北朝期は大將以外の武士が徒歩で戦うようになり、室町時代には大鎧から胴の形が逆三角形の胴丸・腹巻へと変化し、肩から腰で着る様になります。兜鉢は、鎌倉時代に構造変化がありました。鉄の剥板の端に小さな筋立を作ることで、軽量化と強度を兼ね備えることが出来ました。その筋立は、現代のビル建築に使われる H 型鋼のヒントになったとも言われています。



戦国時代には、総大将に自分の働きを示すため、兜に個性豊かな装飾を施す「変わり兜」が登場します。本日お持ちしたもののうち、右は桃山期のミミズクで、猛禽類の力強さを象徴しています。中央は江戸期の蟬で、長い地中生活を経て短い成虫期間に全力を尽くす姿から「やるぞ」という意思を表したのでしょう。左は大小の錐で、「小さなものから大きなものまで貫き通す」という決意が込められています。

甲冑の重さは平安・鎌倉期のフル装備で約 30kg。現代の自衛隊の装備とほぼ同じです。千年前も今も、人が身につけて動ける重さは変わらないのだと感じます。

最後に、私が甲冑を作りながら思うことがあります。海外では日本文化を「わび・さび」と捉えることが多いですが、本当に日本人はそんなに静かで禁欲的でしょうか。平安の真っ赤な大鎧、縄文の火焰型土器、南北朝の婆娑羅——日本人はむしろ華やかさや派手さを好んできたのではないかと。侍たちは命を懸ける場面でこそ、その美意識を甲冑に託しました。私にとって甲冑の美学とは、まさに「命を覚悟した時の美意識」なのです。



<プロフィール>

甲冑師、株式会社西日本甲冑武具研究所（岡山市北区野田屋町）代表取締役、岡山県重要無形文化財・甲冑製作技術保持者である先代・森崎昌弘に師事し、大山祇神社（愛媛県）所蔵の紺糸威大鎧と、岡山県立博物館所蔵の赤韋威大鎧の2領の国宝を復元製作するなど、多くの重要文化財の修復実績がある。国宝や文化財の復元製作や修理を行なっている甲冑師は全国で数人しかおらず、その一人。